

(様式1)

令和5・6・7年度「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」
学校改善プラン(3年次)【中学校】

【学校名等】

学校名	宮津市立栗田中学校							校長名	中村 敏章
学 年	1 年	2 年	3 年				特別支援	生徒数	37名
学級数	1	1	1				1		
事業担当教員名	原田 美智子								
① 中学校区で目指す子ども像	栗田学院 目指す子ども像 (1) 夢の実現に向け 自ら学ぶ子ども (2) お互いが認め合える 心豊かな子ども (3) 健康で元気に生活できる子ども (4) ふるさとを誇り 地域に貢献できる子ども								
② 目指す子ども像	・授業において自分の考えをもった上でそれを発信し、他者の意見も受け入れられる生徒 ・挨拶や他者とのコミュニケーションを大切にでき、人間関係を築く力を身に付けた生徒 ・学院の取組等を通して、自ら考え行動する力や、学院のリーダーとして目的意識をもって行動する力を身に付けた生徒 ・ふるさとみやぶ学を中心とした地域の方々との交流を通して、地域への理解と誇りをもてる生徒								
③ 目指す子ども像に対する現状と課題	<現状> ・やるべきことに真面目に取り組めるので、基礎・基本の学力が定着している。 ・授業における教師主導の学習場面では真面目に取り組むことができる。 ・与えられた学習等の課題をしっかりとやり切れる生徒が多い。 ・自ら分からないことを調べて、学び取ろうという意欲の高まりが見られる生徒がいる。 ・地域や学校への安心感や愛着があり、落ち着いて学校生活、日常生活を送ることができる。 <課題> ・自分の考え、意見等があっても、自分の言葉で伝える自信のなさや間違えることへの不安等が強く、発表などに消極的である。 ・授業における教師主導の学習場面では真面目に取り組むことができるが、活用的な学習では、挑戦しようとする意欲をもてない生徒もみられ、二極化する傾向がある。 ・教師の説明や指示等に安心感をもち、学習が受け身となっている面が多く見られる。 ・初めての環境や知らない場面への不安感をもつ生徒もおり、臨機応変な対応や、即興的な対応を苦手とする面もある。 ・身近で当たり前にある地域に対し、興味・関心が比較的弱く、ふるさとや地域の環境、歴史等の認識が弱い面が見られる。 ・小学校入学時から変化のない人間関係もあり、新たな関係性を築き、対話しようとする意識が低く、仲間との意見交換や関係性を作ったりすることが苦手である。								

④ 目指す子ども像に達するための仮説	・単元指導計画と単元を通して身に付ける力を明示することで、学び取る意欲や、学習の振り返りの質が高まり、学習への自己調整力につながる。 ・毎時間の学びのゴールを設定することで、自己決定力が身に付き、学習の主体者となることで学力が向上する。（認知能力の高まり） ・各教科の特性や単元の学習内容に応じて、生徒が主体となって学習に取り組める学習形態を工夫することで、主体的に学び取る姿勢が芽生える。よって挑戦意欲が高まり、自分らしさが発揮できるようになる。（非認知能力の高まり） ・学年内外問わず、自分の思いや考えを伝える場の設定や、テーマに応じて感じたことや思うことを交流し、違いを知り認め合う機会をもつことで、自己開示することの抵抗感が減り、コミュニケーション能力が身に付く。
--------------------	--

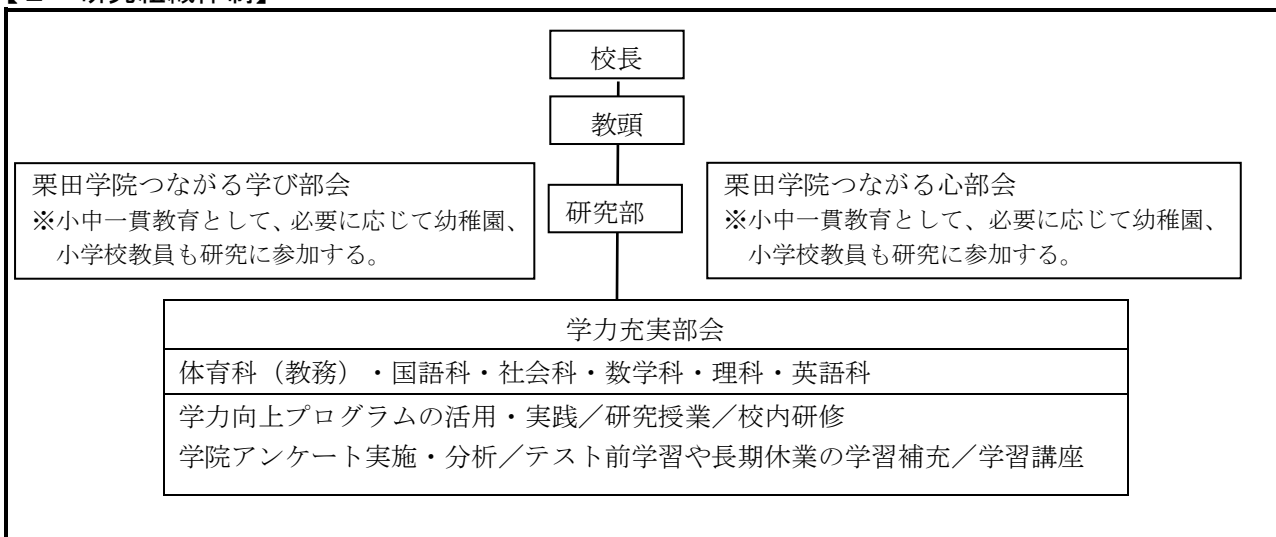
令和7年5月1日現在

【1 研究主題】

主体性・挑戦意欲の高まる指導の研究

～子どもが学び取る授業づくり・コミュニケーション能力の向上を目指して～

【2 研究組織体制】



【3 具体的な取組内容】

- 1 単元指導計画に基づいた単元を通して身に付ける力の明示
 単元導入時に学習後のゴールをイメージさせ、目的と意思をもって学ばせる。毎時間の学習内容は教師から提示しつつ、毎時間生徒個々が「学びの目標」を設定し、意思決定と学習への意欲向上を図る。また、1時間の学びについて文字言語で書いて振り返りを行うことによって、自身の学習を見つめる機会を確保する。そのことで学習の手応えを感じたり、復習の必要性を感じたりと学習への自己調整力を高める。
- 2 学びの土台と学びの方法
 教科の特性や単元の学習内容に応じて、一斉指導での学び、協働的な学び（ペアやグループ学習等）、個別最適な学び（自由進度学習等）に取り組み、生徒自身が学び取る意識を醸成する。協働的な学びについては、不安感をもたずに取り組みたり、必然的に発話したりする環境を設定する。
 栗田学院（幼・小・中）として中学校卒業時から逆算して伸びてほしい力（非認知能力）と系統別学習方法（学習方略）を発達段階に合わせて示すことで、生徒と共有しながら、学習を進めていく。
- 3 対人スキルの向上と認知機能強化のための TALK/SKILL Time の隔週設定
 - （1）TALK Time
 身近なテーマや社会的な話題等について、考えを交流するやりとりを楽しんだり、自分の考えや感じたことを言葉に出したり、他者の考えや感じ方を受け止めて反応したりする中で、コミュニケ

ーション能力を育成する。

(2) SKILL Time

言語情報や視覚的情報等をもとにクイズ形式等の問題を解くことで、論理的思考力や情報処理能力、想像力、記憶力、判断力等を育成する。

(3) 週末課題「オピニオンレポート」

新聞の投書を読んで感じたことや自分の意見を文章で表現させることで、多くの考え方に触れ、そこから自分自身を見つめたり、新たな考え方に取り込んだりする機会を確保する。今年度は、投書に限らず、記事やニュース等の最新の情報を活用し、各教科の特性を生かした題材へと幅を広げる。

4 テスト前学習計画表

テストまでの日程を見通し、自分の課題克服に向けた学習内容を決め、実行する取組を進める。

1学期は、テスト目標と学習内容を決める学活とテスト返却後に取組を振り返る学活を設け、2学期以降は、学級の実態に合わせて学活を設定する。

5 学院アンケートの活用

学院として学期に1回アンケートを実施し、1～4の実践が生徒の認知能力の向上や非認知能力の変容につながっているのか、主体性・挑戦意欲の向上につながっているのかを検証する。

6 校内研修の充実

個別最適な学びや協働的な学びの実践例や理論の研修、そして個人の学びにつなげるための授業改善に向けた研究を行う。また、学力調査や学院アンケートの結果について分析し、課題解決に向けたアプローチを検証する。

【4 仮説及び成果を検証するための質問項目】

学年	質問番号	質問項目	概念	備考
全学年	33	目標を達成するためのよりよい方法をいつも考え、取り組み方を変えていっている。	自己調整	
全学年	53	失敗をおそれず、前向きに取り組むほうだ。	チャレンジ精神	
全学年	57	自分にはよいところがあると思う。	自分らしさの発揮	
全学年	73	授業で新しく学習したことをこれまで学習したものと結びつけて理解したり、話合いで活かしたりしている。	精緻化	
全学年	74	ほかの教科の授業で学んだことであっても、教科に関係なく授業中の活動で活かしている。	精緻化	

* 5、6の分析項目は削除しています。

【7 分析結果を踏まえた指導改善、個に応じた具体的な手立て】

具体的な指導・支援方法

< 1 年 >

○主体的・対話的な学びを生かした自己調整学習の実践

他者と進んで関わろうとする態度や心理的安全性の高さを生かし、対話を通して考えを深めながら、自ら学び方を調整していく力の育成を図る。

【集団】

- ⇒ペア・グループでの意見交流や課題解決型の学習を意図的に設定する。
- ⇒興味がもてる授業や取組を実践し、考えを説明したり比較したりする活動を取り入れ、対話を通して思考を深める授業づくりを進める。
- ⇒目指すゴールを明確にし、授業の中で「ねらい→学習→振り返り」を意識させる。

【個】

- ⇒振り返りシートを活用して自分の学習状況を把握して、改善できるようにする。
- ⇒反復による定着を目的として、小テスト、家庭学習課題などを活用し、基礎的・基本的な内容を繰り返し確認する機会を設定する。
- ⇒視覚的な支援で、すべきことの手順や理解を促し、計画的に取り組めるようにする。

< 2 年 >

○協働的な学びを通して、主体的・対話的で深い学びを促す授業の実践

生徒同士の関わりを意図的に位置付けた学習活動を通して思考を深めるとともに、学習の見通しや振り返りを取り入れ、主体的に学びに向かう態度の育成を図る。

【集団】

- ⇒ペア・グループでの意見交流や課題解決型の学習を計画的に設定する。
- ⇒考えを説明する、比較する、問い返すなどの対話活動を位置付けることで生徒同士の関わりを促す。
- ⇒学習課題の提示や単元の見通しを明確にすることで生徒が目的意識をもって学習に取り組めるようにする。

【個】

- ⇒計画性の向上を図るために、単元の目標設定や学習計画を立てる活動を取り入れる。
- ⇒授業の振り返りを継続的にを行い、自分の学習状況を把握できるようにする。
- ⇒リハーサルや精緻化の値が高いことを生かし、要点をまとめる活動や学習内容を自分の言葉で説明する活動、確認テストや反復学習などを通して理解の定着を図る。

< 3 年 >

○自己選択・自己決定を位置づけた主体的な学びの実践

心理的安全性の高さや学びに対する積極性を生かし、生徒が目標を意識しながら学習方法や課題に主体的に向き合う学習を通して、思考を深める力の育成を図る。

【集団】

- ⇒ペア・グループでの意見交流や課題解決型の学習を計画的に設定する。
- ⇒自分の考えを説明する、他者の考えと比較するなど対話活動を取り入れ、思考ツールなどを用いて学習内容を整理する活動を授業の中で行う。

【個】

- ⇒「ねらい→学習→振り返り」を継続し、自分の学びを整理する機会を設ける。
- ⇒要点をまとめる活動や、学習内容を自分の言葉で説明する活動、学習した内容を関連付けて整理する活動を取り入れる。
- ⇒自己選択・自己決定を促すために、自分で選択する場面を多く設定する。。

【8 仮説の修正】

- ・単元指導計画と単元を通して身に付ける力を明示することで、学び取る意欲や学習の振り返りの質が高まり、生徒が学習の目標やゴールを意識しながら主体的に学習に取り組む姿勢や学んだことを活かして課題を解決しようとする力の育成につながる。
- ・各教科の特性や単元の学習内容に応じて、生徒が主体となって取り組める学習形態（個別・ペア・グループ・他校との交流）を取り入れることで、自ら課題を見出し、他者と関わりながら考えを深めていく力や、対話を通して考えを広げていく力の向上につながる。
- ・授業以外の学校生活や行事などの活動場面において、学年内外問わず色々な人と関われる機会を設定する。そして自分の思いや考えを伝える場を設定することで、自己開示することの抵抗感が減少し、コミュニケーション能力の向上につなげる。

【9 具体的な取組内容の修正】

- 1 単元指導計画に基づいた単元を通して身に付ける力の明示
単元導入時に学習後のゴールをイメージさせ、目的と意思をもって学ばせる。毎時間の学習内容は教師から提示しつつ、毎時間生徒個々が「学びの目標」を設定し、意思決定と学習への意欲向上を図る。また、1時間の学びについて文字言語で書いて振り返りを行うことによって、自身の学習を見つめる機会を確保する。そのことで学習の手応えを感じたり、復習の必要性を感じたりと学習への自己調整力を高める。
- 2 学びの土台と学びの方法
学習に安心して取り組める環境づくりや学習規律の定着など、学びの土台を整えるとともに、教科の特性や単元の学習内容に応じて、一斉指導での学び、協働的な学び（ペアやグループ学習等）、個別最適な学び（自由進度学習等）に取り組み、生徒自身が学び取る意識を醸成する。協働的な学びについては、不安感をもたずに取り組めたり、必然的に発話したりする環境を設定する。これにより、生徒が主体的に学習に取り組み、自分の考えを深めたり、広げたりしながら課題解決を図る力の育成につながる
栗田学院（幼・小・中）として中学校卒業時から逆算して伸びてほしい力（非認知能力）と系統別学習方法（学習方略）を発達段階に合わせて示すことで、生徒と共有しながら、学習を進めていく。
- 3 対人スキルの向上と認知機能強化のための TALK/SKILL Time の隔週設定
 - （1）TALK Time
身近なテーマや社会的な話題等について、考えを交流するやりとりを楽しんだり、自分の考えや感じたことを言葉に出したり、他者の考えや感じ方を受け止めて反応したりする中で、コミュニケーション能力を育成する。
 - （2）SKILL Time
言語情報や視覚的情報等をもとにクイズ形式等の問題を解くことで、論理的思考力や情報処理能力、想像力、記憶力、判断力等を育成する。
 - （3）週末課題「オピニオンレポート」
新聞の投書を読んで感じたことや自分の意見を文章で表現させることで、多くの考え方に触れ、そこから自分自身を見つめたり、新たな考え方を取り込んだりする機会を確保する。今年度は、投書に限らず、記事やニュース等の最新の情報を活用し、各教科の特性を生かした題材への幅を広げる。
 - （4）全校体制で取組推進
全校生徒が交流する機会を工夫することで、対話的な場面が増え、生徒が自分の考えを表現したり、他者の考えを受け止めたりする力が高まり、コミュニケーション能力の向上につながる。
- 4 テスト前学習計画表
テストまでの日程を見通し、自分の課題克服に向けた学習内容を決め、実行する取組を進める。
1学期は、テスト目標と学習内容を決める学活とテスト返却後に取組を振り返る学活を設け、2学期以降は、学級の実態に合わせて学活を設定する。

5 学院アンケートの活用

学院として学期に1回アンケートを実施し、実践が生徒の認知能力、非認知能力の向上に変化をもたらしているのか、主体性・挑戦意欲の向上につながっているのかを検証する。

⇒学びのパスポートと同じレーダーチャートが作れるデータを、小中学校で作成・共有しているので、非認知能力と学習方法の変容を継続して分析していく。

6 校内研修の充実

個別最適な学びや協働的な学びの実践例や理論の研修、そして個人の学びにつなげるための授業改善に向けた研究を行う。また、学力調査や学院アンケートの結果について分析し、課題解決に向けたアプローチを検証する。

【10 生徒の変容（普段の様子から）】

- 1 授業の最初に学習内容の提示をして、個々の生徒が学びの目標を設定し、自分の活動を振り返る流れは定着し、振り返りの内容にも変化が見られるようになった。既習事項を踏まえた学習目標を立てられる生徒も増えており、振り返りから具体的な次の目標を設定できるようになるだけでなく、今度はこんなことをやってみようと思動的に取り組めるようになった生徒が見られる。

学びのパスポートの個人結果表の振り返りシートには返却時だけでなく、2学期末、3学期末にも記入内容との変容を確かめ振り返りを行った。3学期の振り返りの中で、「2学期より友達と一緒に考える時間が増え、教え合うことでより自分の知識として定着させることができた」など、協働的な学びが自分の成長につながると実感する生徒が増えている。

- 2 授業の中で対話的な学習を通して、生徒同士で教え合ったり意見を伝え合ったりする場面が増え、安心して発言できる雰囲気生まれている。また自分の考えを表現したり、友達の意見を聞いて学びを深めたりする姿が多く見られるようになった。

- 3 今年度は、全校で取り組む機会をたくさんもつことができた。それらの活動を通して、学年や学級を超えて多くの人と関わる機会が増え、生徒のコミュニケーションが以前よりも活発になった。こうした関わりの広がり、互いの考えを認め合いながら学び合う姿勢の育成につながり、学習への意欲や主体的に学ぶ態度の向上へとつながっていると感じる場面も見られるようになった。

- 4 金曜日隔週で行っている TALK Time と SKILL Time においては、それぞれのねらいに沿って取り組んできた結果、話し合いを楽しみながら参加する生徒が増え、相手の考えを尊重しながら伝え合う姿勢が育ってきている。

- 5 認知能力に関わる学力ステップはどの学年においても昨年度より向上が見られた。基礎的な知識や技能の定着は進んでいる一方で、それらを実際の課題解決の場面で活用したり、複数の情報を関連付けて考えたりする力の育成が今後の課題である。

- 6 与えられた課題には取り組むことができる。また、課題に対して指示を待つ生徒が見られ、自ら問いを立てたり、新たな考えを生み出したりするなど、主体的に学びを創り出していく力にはまだ課題が見られる場面もある。

【11 次年度の研究構想】

◎テーマ「主体的・挑戦意欲の高まる指導」

～探究的な学びを通して、自分で考え、決定し行動する生徒の育成～

1 主体性・挑戦意欲を高める授業改善・指導の工夫

- 学習の見通しを生徒と共有し、学びの目的や意義を意識した学習活動
- 習得及び活用だけでなく探究を大切にした学習過程
- 生徒が自己決定し学習に臨む環境設定
- 学習の振り返りの価値付け

2 個別の指導支援の継続

- 基礎・基本の定着を図る取組の継続
- 生徒の振り返りから個々の学びの状況を把握
- 授業、授業以外も含めて生徒の言葉や行動の観察による情報収集

3 アウトプットの重視と共有

【TALK/SKILL Timeの発展】

- 目的の明確化
考える力（認知能力）と伝える力（コミュニケーション）の両面から学びを支える活動と位置付ける。SKILLTimeでは、どの資質・能力を高める活動なのかを意識して取り組ませる。
- 学習とのつながりを強める
授業導入でTALKTimeを取り入れ、学習内容についてのミニ対話など、自分の考えを持つ習慣を育てる。
- 対話の質を高める
理由を付けて説明したり、質問したりするなど話し方のポイントを共有し、司会やまとめ役、質問役など役割を決めてみるなどの工夫をする。

【週末課題 オピニオンレポートの発展】

- 感想だけでなく、理由や根拠を明確にして自分の意見を表現することを意識させる。
- 書いた内容を共有する機会を設け、他者の考えに触れることで視野を広げる機会とする。

4 学習アンケートの活用

- 令和7年度に引き続き継続して実施

5 計画的な校内研修

- 「目指す子ども像」を含めた目指す姿の共通理解
- 課題を共通理解し、具体的な姿として言語化
- 学期ごとに実践の方針と振り返りを行う校内研修の実施
- 教職員一人一人の授業への思いや実践交流し、教科の特色を生かした授業研究

※A4判で8枚程度にまとめてください。